

日本社会福祉士会  
三十年史



公益社団法人 日本社会福祉士会



# ■ 日本社会福祉士会三十年史 目次 ■

日本社会福祉士会設立三十周年を迎えて …… 1

歴代会長からのメッセージ …… 2

## 第1部 日本社会福祉士会三十年の歩み

### 第1章 総論 ～10年間の会の歩み～

- 2013年度（平成25年度）／ 8
- 2014年度（平成26年度）／ 9
- 2015年度（平成27年度）／ 10
- 2016年度（平成28年度）／ 11
- 2017年度（平成29年度）／ 12
- 2018年度（平成30年度）／ 14
- 2019年度（平成31年度・令和元年度）／ 15
- 2020年度（令和2年度）／ 17
- 2021年度（令和3年度）／ 19
- 2022年度（令和4年度）／ 20

### 第2章 各論

- 第1節 中期計画について／ 22
- 第2節 連合体体制の確立／ 27
- 第3節 権利擁護の取り組み
  - ① 成年後見制度を取り巻く状況の変化／ 32
  - ② 未成年後見支援体制の確立（養成・保険）／ 35
  - ③ 「高齢者・障害者虐待対応に関する提言」の取り組み／ 37
- 第4節 生涯研修制度と認定社会福祉士制度／ 39
- 第5節 政治的アプローチ／ 46
- 第6節 「こども家庭ソーシャルワーカー」認定資格に関わる経過について／ 49
- 第7節 ソーシャルワーカー関係団体との連携  
～日本ソーシャルワーカー連盟の動き～／ 53
- 第8節 倫理綱領・行動規範／ 57
- 第9節 新型コロナウイルス感染症（COVID-19）拡大に伴う本会の対応／ 60
  - ◎ コロナ禍におけるソーシャルワーク実践に関する基礎的研究／ 66
- 第10節 災害支援／ 72

## 第2部 資料編

- 全国大会の概要 / 80
  - 本会が表明した声明文、意見書、要望書等（2013～2022年度） / 85
  - 日本社会福祉士会 公的審議会及び委員会等への参画（2013～2022年度） / 91
  - 日本社会福祉士会 補助金・助成金事業一覧（2013～2022年度） / 99
  - 日本社会福祉士会 編集書籍一覧（2013～2022年度） / 101
  - 日本社会福祉士会 災害支援一覧（2013～2022年度） / 102
  - 日本社会福祉士会 正会員の構成している会員数推移（2013～2023年） / 104
- 第三期中期計画（2019～2023年度） / 107

編集委員会委員・執筆者一覧

# 日本社会福祉士会 設立三十周年を迎えて

公益社団法人日本社会福祉士会 会長 西島 善久



1993年1月15日、「歴史に一度！ 人生に一度！」を合言葉に東京都八王子市に有志が集まり、設立総会が開催されました。ここに「日本社会福祉士会」が誕生し、全国への組織化が呼びかけられました。翌日の16日には、第1回目の「研究大会」が開催されています。

昨年（2022年）7月には、第30回全国大会が東京都江東区で開催されました。新型コロナウイルス感染症の取東が見えないなか、約1,500名の社会福祉士が参加し、一堂に会することができたことに強い感銘を受けました。本年（2023年）1月に本会は設立30周年を迎え、記念誌の発刊に至ったことを社会福祉士会会員の皆さまとともに喜びたいと思います。また、厚生労働省をはじめ、本会对し、ご理解・ご支援頂いた皆さまに心からお礼を申し上げます。ありがとうございます。

はじめに、ここ10年前後の動きを少し振り返ってみたいと思います。

本会は2012年4月に47都道府県社会福祉士会を正会員とする連合体組織へ移行し、2014年4月に公益社団法人の認可を受けました。組織改編に伴い、翌2015年6月には、都道府県社会福祉士会を正会員とする職能団体として、倫理綱領の遵守、人々の権利擁護及び生活支援に向け、「公益社団法人日本社会福祉士会憲章」を定めています。

国の動向を見ると、2015年9月「新たな時代に対応した福祉の提供ビジョン」の提示、2016年7月「『我が事、丸ごと』地域共生社会実現本部」の設置、そして、2017年9月には「地域力強化検討会 最終とりまとめ～地域共生社会の実現に向けた新しいステージへ～」が示され、社会福祉法の改正も行われました。地域共生社会の実現に向けて、ソーシャルワークの必要性が確認されています。

また、2018年3月には社会保障審議会福祉部会福祉人材確保専門委員会から「ソーシャルワーク専門職である社会福祉士の役割等について」が取りまとめられ、社会福祉士がソーシャルワーク機能を発揮することへの期待や、養成カリキュラムの見直しの必要性が示されました。

これら国の動きに共通するのは、誰もが地域で安心して暮らしていくために、さまざまな分野でソーシャルワークを基盤とする支援が求められているということです。

子ども分野では、児童虐待により子どもの命が奪われる事案が繰り返されました。児童福祉法の改正をはじめ、子どもを守り育てる社会に向けての政策が進められ、2023年4月こども家庭庁の創設へと繋がります。この間、子ども分野における国家資格創設の動きがあり、本会は社会福祉士の活用を主張し続けています。

本会は、将来ビジョンに向けた中期計画に「ソーシャルワークの推進」「活動基盤の強化」「専門性の向上」を掲げ、社会福祉士の任用拡大と実質的な業務独占を目指して、政治的なアプローチも含めて取り組んできました。まだまだ、道半ばではありますが、ソーシャルワークへの期待を背景に、将来ビジョンの実現に向け、一步一步進んでまいります。

『日本社会福祉士会三十年史』には、本会の30年という歴史が刻まれ、過去の歩みを振り返りつつ、今を見つめ、未来へ向かう思いが綴られています。

必ずしも社会福祉士が十分に活躍できる環境とはいえませんが、30年を節目として掲げた目標の達成に向け、日本社会福祉士会と都道府県社会福祉士会が連合体として団結して取り組むことが大切です。そして、都道府県社会福祉士会の発展とともに日本社会福祉士会が発展するという思いを30周年の記念に重ねたいと思います。

## 歴代会長からのメッセージ

# 歴史を紡ぐこと



第2代会長

**橋本 正明**（社会福祉振興・試験センター 理事長）

日本社会福祉士会の30周年にあたり思うことは「歴史とは何か」という問いかけです。

或る辞書によると、歴史とは確かめられた事実の集成から成るとあります。「歴史とは現在と過去との対話である」と言ったのはイギリスの歴史学者 E.H. カークです。複雑な諸要素が絡み合っていて動いていく現代では、過去を見る新しい眼が求められます。ロシアのウクライナ侵攻を理解するには、1933年のホロドモールや1939年のフィンランド冬の戦争を知る必要があります。同様に温暖化、SDGsを考えるのには、産業化される前の生活を知ることが手がかりとなります。そして、その対話が現在の状況の理解と未来への展望をもつことに繋がります。

さて、日本社会福祉士会の30年です。10年、20年の節目には会の歴史の小括的な年史が発行され、そこで今回30年の小括です。足元を見ればこの10年間の社会の変化、また会の歩みにも激しいものがありました。

しかし、会の草創期に働いた者にとっては、その前史を含めた頃のことを抜きにしては現代を語れません。会員諸氏にぜひとも一読をお願いしたいのは、2003年に発行された『日本社会福祉士会十年史』（編集委員：西澤秀夫、池田恵理子、金井守、澤伊三男、戸栗栄次、原田正樹）に掲載された「日本社会福祉士会十年の歩み」です。序章から終章まで72ページの歴史の証言です。構成は序章「『社会福祉士』の誕生まで」、第1章「社会福祉士の誕生と組織化」、第2章「組織の発展と法人化」、第3章「法人化後の試練と成長」、第4章「社会福祉基礎構造改革と社会福祉士会」となっており、その時代の詳しい状況、事態の背景が赤裸々に明らかにされています。そこから私たちが現下の社会福祉士（会）、ソーシャルワーカーのあり様をどのように理解し、将来図を描くのか、過去と対話し現代を理解するのかという問いかけです。そこに歴史を紡ぐことの価値を見るのです。

2022年3月現在の会員総数は4万3,124人、2023年社会福祉士国家資格試験の合格者数は1万6,338人、認定社会福祉士の数は約1,000人、この数字の意味をじっくり見極める必要があります。

ホロドモール：1933年ソ連によって起こされたウクライナの人為的な大飢饉  
フィンランド冬の戦争：1939年に起こったソ連によるフィンランド侵攻戦争

# 日本社会福祉士会 三十周年を迎えて



第3代会長

**青木 孝志**（公益社団法人埼玉県社会福祉士会 相談役）

二十年史のときのように「夢」が語れない。前は「21世紀を代表する専門職は社会福祉士である」と書いた。しかし、今はその実感を抱くことができない。

会運営はそつなく無難、研修制度は硬直化していると思えるほどに確固たるものになっている。ひと頃、本会に所属する社会福祉士の優位性を強調すると、既得権に胡坐をかく圧力団体のように言われたこともあったが、今はそれを感じることも少ない。本会の活動が成熟してきたといえるのかもしれないが、総じて発展途上のような熱気が感じられない。

そこにはさまざまな要因があろうが、最大のものは組織率の低下であると考え。あたかもこの国の出生率のように加入する社会福祉士の割合が減少し続けている。生まれた時から社会福祉士制度が存在していた若い人たちへの働きかけとして、子どもだましのような値引きや景品付与でよいのだろうか。考えられるさまざまなメリットを提示しても入会しないのはなぜだろう。

私はその根本的な要因は「社会福祉士の養成課程」にあると考える。今回は、この1点に絞って意見を述べておきたい。

授業のなかで職能団体（社会福祉士会）の存在意義と具体的な活動内容、そして生涯研修に励む必要性等を説明しているのだろうか。講義しているはずと言うかもしれないが、要はどれだけ実感を込めて説得できるかである。

社会福祉士の倫理綱領は本会が採択したものであり、それを社会福祉六法にも、養成講座のテキストにも載せている。なぜ強く「専門職能団体に入会して社会福祉士の倫理綱領を遵守した活動をしよう！」と繰り返し呼びかけることができないのか疑問である。

今回のカリキュラム改正で、実習時間が増えた。それだけ実践現場の社会福祉士とともに学ぶ機会が増えたということであり、資格取得後の職能団体加入を働きかけるチャンスが拡大したといえる。

どのような社会福祉士になりたいかを決定づける大切な実習場面の指導者と、演習・実習指導を担当する教員の使命は極めて重要である。今こそ、日本社会福祉士会は敢えてエゴを承知で、これら実習指導者及び教員を職能団体所属の社会福祉士に担わせるという要望活動（業務独占）を組織的に展開することを提案したい。

# 更なる高みを目指して



第4代会長

杉村 和子 (社会福祉法人聖徳会 副理事長)

日本社会福祉士会設立30周年おめでとうございます。

日本社会福祉士会の設立総会は1993年1月15日ですが、国家資格である社会福祉士の誕生に至るまでには長い道のりがあります。「まぼろしの社会福祉士法制定試案（1971年11月発表）」から始まり、1986年8月に行われた「社会福祉教育懇話会」による提言が我が国の「社会福祉専門従事者の資格制度化」に発展したという経緯があります。

実に16年を経て、1987年5月26日「社会福祉士及び介護福祉士法」が公布され、2年後の1989年3月末に第1回目の社会福祉士国家試験が実施されました。この時の合格者は180名、第2、3回目の国家試験では合格者が1,000名を超え、会設立の機運が高まります。西澤秀夫氏が「新しい酒は新しい革袋に」と会創設に尽力されていたことを懐かしく思い出します。設立時の会員は555名でした。2023年7月現在、4万5,326名となり大きく発展しました。

私たちの会設立には多くの時間と、専門職団体をつくろうと動いた多くの人たちの熱い思いと支援があったことを忘れてはなりません。また、このことを語り繋ぐことも忘れてはならないと思います。

2003年6月に発行された『日本社会福祉士会十年史』には、会の誕生前の秘話や10年目を迎えた嬉しさが凝縮されています。また、2013年7月発行の『日本社会福祉士会二十年史』には「新公益法人制度」と連合体発足への苦労を重ねた移行時のことが記されています。

その後の10年も激動の時代でした。我が国の社会情勢が大きく変化するとともに、社会福祉士に期待されることが多くなり、社会福祉士の養成方法も大きく変わりました。

まさに会が成長していく証として『日本社会福祉士会三十年史』にはその詳細が記され、歴史となってこの後に継承されていきます。しかし、人に例えれば「青年期」、まだまだ若輩者ではないでしょうか。奢らず、地道に歩みを進めませんか。

私は1993年から2001年の間、会運営の中核に関わらせて頂き、最後は会長の大役を仰せつかりました。会創立と社会福祉基礎構造改革の真ただ中、何事にも代えがたい経験をさせて頂きました。今でもその当時の仲間たちとの交流を大切にしています。

日本社会福祉士会がこの後も創立40年、50年の節目を迎え、専門職団体として益々発展されることを祈念致します。

# 日本社会福祉士会 三十周年を迎えて

第6代会長

村尾 俊明（社会福祉法人清風会 理事）



公益社団法人日本社会福祉士会が設立 30 年を迎えられたことをお慶び申し上げます。

また、この間の会員の方々のご努力に敬意を表しますとともに、各方面の多くの方々からご支援やご激励等を頂いたことに改めて感謝し、御礼を申し上げます。

近年はコロナ禍の影響を受け、会員の皆さまも本来の活動が著しく制限されご苦労された時期が長く続きましたが、近時沈静化の兆しが見え、安堵されていることと存じます。

私が 3 期携わった会長時代の思い出は多々ありますが、その 1 つに事務所の移転があります。会員の皆さまのご努力で現在の四ツ谷駅近くに移転することができ、全国各方面からの本会へのアクセスの利便性が一段と増したことで、会員のみならず関係団体等とも広域で多様な交流等が促進され、本会の活動の活性化に大きく寄与することができました。

会長退任後の私は、一時期地区会の活動に参加しましたが、その後も一会員として成年後見や第三者評価などの業務に関わり、現在もいくつかの社会福祉法人や障がい者親の会との交流など、ささやかな活動を続けています。

本会や他の福祉関係団体等から、今も私宛にさまざまな資料等が送られてきており、我が国の最新の福祉施策の現状や課題の一端にも触れることができていることから、今後とも何らかの社会貢献に繋がる活動を私なりに続けたいと思っております。

この度の日本社会福祉士会設立 30 周年を機に、本会会員の皆さまの今後の活動のさらなる活性化により、我が国の福祉施策の今後益々の充実発展に寄与して頂くとともに、ひいてはその成果が海外諸国等との交流促進にも活かされることを期待しています。

最後に、会員の皆さまのご健勝と本会の今後益々のご発展を祈念いたします。

# 日本社会福祉士会 三十周年を迎えて

第8代会長

鎌倉 克英 (社会福祉法人禱友会 理事長)



1993年、東京八王子において行われた第1回全国大会から始まった私たちの「日本社会福祉士会」が30周年を迎えましたことを心からお慶び申し上げます。

『日本社会福祉士会二十年史』巻頭に故 山村睦会長が記された思いを引き継ぎ、会員一人ひとりの力を集結して、日本社会福祉士会は2014年4月公益社団法人となりました。今思い起こしても心が躍ります。

さて、日本社会福祉士会30年の歴史を振り返ってみますと、いくつかの分岐点が見えてきます。

1つ目は1995年1月17日の阪神・淡路大震災です。まだまだ未熟であった社会福祉士がそれぞれの立場で復興の一翼を担ったことは、会の財産となりました。

2つ目は1998年7月に国際ソーシャルワーカー連盟(IFSW)に加入したことです。1970年代にソーシャルワーカーは「Think globally, act locally」とよく言っていたものです。私はこの言葉が好きです。日本各地での福祉のはたらきが、日本でそして世界で認められる。すばらしいことです。

3つ目は認定社会福祉士制度です。この制度は、社会福祉士の実践力を担保する民間認定の仕組みとして制定され、2012年度から運用を開始し、2023年4月1日現在、908名の認定者が誕生しています。社会福祉士という国家資格は国民のために創設されました。資格者は知識と技術と使命に基づいて実践しているかが問われます。「少子高齢化時代」の大きな壁を乗り越える力をもっているのは認定社会福祉士であるということを私は信じています。

4つ目となる分岐点は「新型コロナウイルス感染症の世界的な蔓延」です。人が集まれないのです。Web会議、通信販売利用が当たり前になってしまいました。「人間らしく自分らしく生きる」ことができなくなる「災害」が身近にあり、規模も世界的であるというときにソーシャルワーカーはどう立ち向かうかという新たな課題を突きつけられました。

日本社会福祉士会には30年の歴史が刻まれました。さらに未来に向かって私たちの歴史を積み重ねることができ、会の発展と会員の皆さま一人ひとりのご健勝とご活躍を願います。